

箱根火山と大涌谷

小山真人

こやま まさと 静岡大学防災総合センター教授。近著に『富士山 大自然への道案内』（岩波新書）

箱根火山は、およそ65万年前に誕生し、複雑な生い立ちをたどった活火山である。4万年ほど前からカルデラ内に次々と溶岩ドームが形成され、それらの崩壊による火砕流がたびたび発生した。最近3000年ほどの間は、大涌谷付近で平均600年に1度程度の水蒸気爆発が繰り返されている。今世紀になって地下の熱水活動によるとみられる群発地震が数年に1度起きてきたが、2015年の群発地震は噴気活動の顕著な異常をとめない、6月29日のごく小規模な噴火に至った。その際、噴火警戒レベルが3に上げられて大涌谷周辺は立入禁止となったが、現在はレベル1に戻されて昼間の観光が可能となっている。空撮に用いた機体はDJI社のPhantom 2 Vision+とPhantom 4である。



写真1—噴気を上げる大涌谷。大涌谷は箱根火山の中央火口丘のひとつ神山の北側にある地熱地帯であり、2015年の群発地震と噴気活動の高まりに伴い、その一部でごく小規模な噴火が生じた。火山ガスの濃度上昇によって大涌谷とその下流の森林が変色していることが写真からわかる。2015年8月7日撮影



写真 2—北西から見た箱根カルデラ。中央の高い山が中央火口丘の神山で、その右側に芦ノ湖が見える。神山の左肩付近の噴気を上げている場所が大涌谷。3000 年ほど前に神山が山体崩壊を起こし、崩れた大量の土石が手前のゴルフ場とその奥の別荘地のある扇状の地形をつくった。2016 年 11 月 6 日撮影



写真 3—神山と大涌谷。写真 2 で説明した神山の山体崩壊によってえぐられた岩壁が、その後成長した冠ヶ岳溶岩ドーム(写真右上の三角形の山)を取り囲んでいる。左側の噴気帯が大涌谷。2016 年 11 月 3 日撮影



写真4—南西側から見た大涌谷の全景。右端の凹地群(白矢印)が、2015年噴火で誕生した4つの火口。そのうち最も手前のもの(15-1火口、写真5参照)がいまだに噴気を上げている。2016年11月3日撮影



写真5—北西側から見下ろした15-1火口。直径は20mほどで、火口の底に沸騰する湯だまりが見える。2015年7月15日鈴木雄介撮影